

中國兵亂記 三

藝州勢成羽へ陣替并松山城兵働の事

天正三年三月七日に藝州の諸大將成羽へ御陣替の節、先勢廣瀬を押し行く節要害より突て出て、安國寺備へ切て懸り、摸首座を始め數輩討捕る故諸將驚き去り往く。此要害を打破れと鐵炮を打掛け乘込候故、松山城へ逃入る。松山よりも玉村の渡し四條・原・魚梁場三口へ人數出し相支ふ。藝州方より足輕千人三口へ働き相戦へば、城兵引入る。鷄足山に備居る城兵七百餘、坂の半へ下り數刻相戦ふ内に、六幡山の上に陣取る宍戸が一手、高陣の後を廻り近々と押寄せ、頼久寺の上より廻り城兵へ弓射掛け、鐵炮打掛け突て懸り、數刻相戦ふ。藝州勢數百討れ立足もなく麓へ被追下。鷄足山の出崎より中島大炊助・三村孫兵衛四五百騎相隨へ、横鎗に突掛れば、城兵引上る節、眞先に進む元親の譜代石川久武の郎等二百三十騎討捕れば、隆景譽感不淺。藝州勢も六百三十枕を並べ討死す。宍戸備前守は一萬餘相隨へ大離の砦へ押寄せれば、城兵敵の大勢成故か、同日午刻に要害より不殘突出て、數刻相戦ひ多勢討れ散々に成り、殘兵周章候や、要害を自放火して側なる嶮岨に取上り、敵を外目になして相戦ふ。藝州方雖爲猛勢、郷里山谷無案内故、城兵以三小勢、每度得勝利候は、山の案内鹿道迄能く知り掛引自由成る故、同日申刻に藝州方足を亂しければ、城兵追慕ひ候故引取事雖成時、中島大炊助三百餘を召連れ、鹿道より城兵の備の後へ駈登り、鬨聲を擧げ城兵の備と城の間を切取り相戦ふ時、宍戸備前守・杉原播磨守・浦兵部少輔・梨羽中務大輔大返し、前後より取包み相戦ふ。双方に手負死人無限。其戰の間に藝州勢繰引仕ける。城兵山の出崎へ出張鐵炮打掛け、藝州後勢を追散し、旗幕指物を城内へ奪取る。籠城の老若勇めども、元親は氣遣不淺。可開運間身行を定るは、夜に入れ共帯を不_レ可_レ解と軍勢へ觸れ渡る。裡無_レ之時は酒を用ひ間敷、自身用ゐる時は小樽にても役所の頭々へ送る。元親の眞實

*以下數句不明
但し備中集成
志には「元親
氣遣ひ其心蘭
然として固屋
に入りても帶
をも解かず興
あれども酒を
飲まず軍旅
の外なしとぞ
見へにけり軍
士へ配を給り
候へば士卒愈
々情に感ず
とあり

を感じ小盞の時も數盃に酔ひける。隆景中島大炊助・三村孫兵衛に被_レ申渡るは、近國爲見懲_レ當城被_レ成_レ御退治一候へ共、數年藝州へ忠節の三村なれば、後々は家をも可_レ被_レ立間、身命無_レ恙立退候様_レに御内意の趣を、刑部報恩寺清水法印へ申含め籠城させ、隆景御内意を達すれば、千死一生と思極候。元親一類譜代共二心出來、中島元行・三村親成へ頼み藝州へ内通多く出來、本丸へ手切れ矢射懸け、妻子を散々に引退る。

備中松山攻給ふ事

藝州方へ城内より數度夜討を掛け、日々遂_レ防戰_レ注進、諸方より毎日如_レ引_レ櫛齒_レ首五十七松山へ不_レ來日はなし。惣門に柵を結び、掛並ぶる首三千百十六也。藝州小勢ならば可_レ爲_レ難儀_レ所に、御本陣へは身方討る、無_レ通路一募_レ武威_レ給_レふ事、廣大なる御大將と成_レ恐。城内譜代の者共申すは、非_レ可_レ背_レ君勵_レ義より無_レ外_レば、兵糧も鹽も來春迄は可_レ堪と云ひ合ひける所に、家親代今以て厚恩を請る竹井宗左衛門・河原六郎右衛門へ、從_レ隆景卿_レ御懇志_レ淺を元親聞傳へ疑掛る故、石川久式を頼み無_レ別心_レ旨を誓紙を調へ申上げんは本心と心得、井山雄西堂有_レ同道小松山へ上り、元親へ佗言被_レ申所に、六月二十日朝天神丸へ野菜を下部に爲_レ持上る。門番策とは不_レ知。扉を開き入る後を押立つれば、只今歸る、其儘と斷る故、相待つ間に、藝州へ内通の大月源内・小林又三郎、城中へ馳入り、久式の女中息女を人質に取る。續きて土居・工藤・田中・蜂屋・肥田・土師者共數百人、天神丸へ押込み鬨聲を擧ぐ、石川久式は天神丸持口と云ひ、妻子の成行無_レ覺束_レ思ひ、物具を着し馳向ひければ、元親被_レ申は、催_レ諸勢_レ只今可_レ挫、同勢を待給へと久式へ被_レ申ける内に、大松山守三村左馬允、佐内丸守三村兵部丞、三本松守日名助左衛門・徳重六郎左衛門・河上孫九郎何も討死可_レ仕事塵芥共不_レ思、有_レ持口違_レ某只粉骨の程不_レ掛_レ御目_レ事殘念と申しければ、元親頼母敷思ひ、古老の者共申は天神丸にて切勝敵討捕共、今日の生涯三日に可_レ延か、魚梁庭_{（イサノテ）}の後へ隆景卿の御旗見ゆるぞ、天神丸の逆心は同意に命を可_レ扶_レと耳語きければ、身命の扶_{（タスクルト）}言に不_レ欣無_レ者皆尤と同心し、銘々人質を三村孫兵衛方へ連來り、本丸の敵に成り手切の矢本丸へ射込む。吉良常陸は、足弱共を引連れ本丸にて取籠る。敵身方

譽感仕りける。不知仁義背_レ武道者、樂々尾杉・諏訪・南江・升原・佐藤・神崎・山本・布施・林・渡部・山川・神原何れも元親譜代也。淺ましき心中と憎まぬ者はなし。元親久式は諸方の相圖を待居る所、難_レ頼は當世の郎等、反つて本丸へ手切の矢を射込む。元親申すは、譜代の奴原敵の備へ加り候へば、敵方には競を傳候。當丸の者忘却に見及候。宗徒の者共討たるれば、當城可_レ及急難と申す。馬酔木丸守新山玄蕃助申すは、兼ての調談に如_レ是成行候時は、相畑にて可_レ曝_レ屍と御定候。明日にも成候は、敵方彌可_レ増_レ人數候。時節能候。いざ一働きと申す時、田中藤兵衛申すは、左様の談議は無事成る時、今日の軍をば某に御任せ候へと申す。元親損_レ氣色傍若無人の申様哉、乍_レ去_レ文士は隨_レ賤教國主は恥_レ民口、と曲留_レ仕り一働と申候へば、譜代の侍三百騎相隨ひ元親久式二手に成り障子瀧迄出張る。三村與七郎・梶屋織部・田井又十郎・上田加介、相畑樺へ城戸逆木を引破り家々に掛_レ火、元親の罰は端的ぞ思ひ知れと申し、相畑逆心の者危き命を扶かり天神丸へ逃込む。二十日暮に及び、本城宗徒の者五六十騎取退く。敵は彌近陣に寄來れ共、本丸堅固に相抱ふ。隆景卿被_レ申は、此城急に挫かば人數數多可_レ損。只今迄爲_レ届侍共者、元親に可_レ並_レ枕譜代可_レ成ぞ。以_レ方便_レ人數不_レ損様にと、中島元行城内へ様々探りければ、千死と究りたる腹心、爪牙の勇士と被_レ頼たる郎等、敵方へ人質を連れ掛る。残り留り忠義を守る人々は、石川久式・三村右京亮・同左馬允・同兵部・同大藏・同與七郎・井山雄西堂・日名助左衛門・吉良常陸・梶屋織部・上田・木村・吉井・山口・門田・升彌助・同甚六・兒阿彌、侍五十騎小座敷に集り、爲_レ金打_レ申は、今生の事は不_レ及_レ申、死出の山路三途の川御供申さんと何れも申合ければ、元親久式向_レ顔含_レ笑。元親の取立て給ふ甫城檢校は、松山籠城の由及_レ聞京都より下り、籠城仕り御最後の御供可_レ仕と望候へば、是非下城候へと進め、下部を附け城の籠迄下_レ候へば、衣類財寶剝取らんと檢校を討果す。不便成る次第、中村善右衛門と申牢人一列に下る處に、是を見て狼籍の棟梁日名源次郎が細首を討落せば、調者有ぞとて數十人立向ひ切伏す。元親は一類老從へ爲_レ暇乞_レ盃を出し、數刻及_レ酒盛所に、馬酔木出鼻丸へ中島大炊助攻口より火矢を射掛れば、風呂屋に燃付き大矢倉へ火渡り、麓二三里の間如_レ晝。元親は敵不_レ近付_レ先に切腹せんと申けるを、石川久式申すは、一先爰を落給へ。天神高田兩所の身方堅固に候へば、落着く身方程近に候。織田信長

卿の御契約、從_レ豊後_二大友の御約束の誓紙をも御守り候へ、細川眞之_・三好左京太夫數萬騎を相隨へ、近日可_レ有_二渡海_一と申來り候へば、此度は被_レ恃_レ御身候へと諫めければ、元親嘔ひ、今夜當城を落忍び、明日日本の國殿に成候共、流石清和源氏を穢し先祖の名を下し可_レ申哉。信長の契約大友宗鱗_・細川眞之_・三好家の加勢不_レ可_レ待。神も當家を捨給はゞ、於_二弓矢之道_一は神未來歲無_レ頼ぞ。各の御諫め更に難_レ心得_レとて、彌切腹に被_レ極、妻子從類を鹿の拔道より玉村へ送りける。

松山城沒落并三村元親切腹之事

同年六月二十一日日本丸に残り留る城兵、石川久式_・井山雄西堂郎徒三十騎に過ぎず。各元親へ申上候は、御切腹候て御名を發_二日本_一給ふ共、屍の鬱憤は散じ申間敷、爲_レ後戰_二御立退候へと申す。元親は久式へ被_レ申は、貴所は一先阿波讃岐方へ忍ばせ給へ、四國因幡丹後の身方へ被_二申合_一重て遂_二本意_一給へ。草の蔭にて可_レ爲_二感悅_一。久式申は、元親の御身體に可_レ連覺悟にて當城へ罷籠候。兩家を斷絶させん事如何とあれば、一類是非々々立退き給へと、元親を進て、妻子一門三十餘人庭敷を立ち、兩大將一所に成て麓へ下る。升彌助_・兒阿彌は、元親落行き給ふを不_レ知體にて大手に向ひ鐵炮戰仕る。各落延び給はん時跡より追付、主人の手を引き阿部山へ忍び入る。藝州の侍大將は松山城へ入替り、門々に警固を置き、落人あれば注進せよと觸廻す。元親、升彌助に申すは、國の者拜拜仕けれども、今は卑怯の先掛_{（懸）}を仕る。汝一人是迄の屈神妙也と泪を流す。彌助申すは、某他國者に候へども、從_二家親公_一被_レ掛_二御目_一不_レ淺に付、御臨終迄御供仕らんと存入候。御具足を致_レ拜領_二度候某松山城の門へ登り、乍_レ恐_レ元親と名乗て切腹仕候はゞ、敵他國衆なれば私の屍を見知間敷候。左候はゞ諸口の番士共窺_{（覗）}候へば、中津井口を被_レ掛_二御心_一、高田の方へ御急ぎ被_レ爲_レ成候様に申上候へば、昔漢の高祖が城を楚の項羽攻る時、高祖の臣下に紀信と云ふ者偽圖り誅_二君降_一城事、汝が諫是に過たりと感じ給ふ。暫時も非_レ可_レ存命、急ぎ松山へ登り、元親切腹仕る間檢使を給はらんと、敵將へ申達候へ、飢死して無_レ詮。老母へ此形見を指上げ供佛施僧の營み頼入る由申候へ、君生害に敵の迎に參る事、非_レ武

義と申せば、元親方於背此趣は今迄の届け無詮と申候へば、敬は違と承候と泪を流し御暇を申し、阿部山を立出て、形見の品々を持ち母上に指上げ、其後君生害の便は難心得と獨言云ひ、松山の城の門へ掛込み、三村家の近習に升彌助と名乗り掛け、河村新助を切倒し五三人に手を負せし時に、敵大勢掛合ひ討捕らる。敵身方惜みける。元親は檢使の敵來らんと、側なる山に上り見れば、松山程近に見ゆる。此城にて不果事今生の後悔後生の障に成り候。麓へ立出て城内へ遂案内可切腹と思ひ定め、六月朔日松蓮寺の大道へ行見れば、在所の者に行合ひ、元親爰に罷在り切腹仕る間、檢使を被下候様に城内へ申達候へと、在所の者に申含め待居ける。松山城門へ上り右の趣を御注進申上れば、爲檢使兒玉長門守粟屋與惣右衛門、爲警固桂民部大輔天野五郎右衛門を被仰付申。元親向檢使爲亡父孝養浮田和泉守を可討取と存る所に、濁世とは乍申天道も無惠候。人盛なる時は天曲て退くと只今存當り候。不入儀に候へ共隆景卿へ細書一通認置候。

大庭加賀守殿は輝元公へ歌道師範なれば、
殘し置く言の葉の陰迄も哀を掛て君を問へき
元親

細川兵部大夫へ呈一通

一度は都の月と思ひしに我待夏の雲にかくる、
局

竹田法印は親類なれば

言の葉の傳のみ聞て徒に此世の夢にあはて覺ぬる
同

老母へは自筆

思ひ知は行歸へき道もなし本の直を其の儘にして
同

辭世

人といふ名を借程や末の露消てそ歸る本の雲に
同

前匠作一瞬源樹居士

鑿頭爐炭清涼殿 劍樹刀山遊戯城

と書留め、天正三年六月二十二日生害仕り、介錯石尾尾助四郎。元親の首は備後國鞆津へ被遺、將軍義昭公奉備實檢。千兵易得一將は難求と、皆不惜人は無かり梟。

石川勝法士三村一族被誅事

石川久式の子勝法士其外妻子、備前國天神山城へ忍落んと心懸落行を、同國賀茂郡虎倉城主伊賀左衛門路次にて生捕り御本陣へ渡す。勝法士親族十人餘中島大炊助に御預候故、勝法士を出家に御作し被下様にと申上ぐ。御評定半に勝法士番侍に語るは、久隆より我等を被送節、從御當家爲迎歴々被遣候節、某、古家來共に路次にて行逢ひければ乗打仕候。失君臣禮儀候其段は、被背程の爲主君と申は還て恥なれども、歷々の方へも乗打仕候馬鹿者にて候。番侍是を聞き振舌候。勝法士丸を久隆より御本陣へ送る時、扇子に歌を書せ遣ける。

夢の世にまほろしの身の生れ來て露に宿借る宵の稻妻

と在るを勝法士丸披見仕り、我等も御本陣へ行きなば被殺事必定也。脇指を不被奪ば切腹すべき物をと申し、泪流しける趣隆景卿へ申上れば、扶置きなば後戰の種子に可成者也と、於井山谷被果ける。三村一類石川久式一族追々に尋出し、不殘於井山殺害。一椎の塚に納置き、一家滅亡到來。三村右京亮政親父子三人、因幡丹後の内に忍びける。

備中國平均從毛利輝元卿軍將へ被行忠賞事

備中の國平均仕り城々の御仕置被仰出、松山城は天野五郎右衛門・桂民部大輔城代に被仰付。小田郡猿掛山城は毛利治部大輔元清御居城に被成故、石田の要害一攝に御普請被仰付候。手の庄國吉城は吉川駿河守に給はれば、今田山城守城番。窪屋郡幸山城は小早川左衛門佐に被下、城代は中島大炊助御旗本より加番を被指加候。下道郡鬼身山城は宍戸備前守に給る。同善左衛門在城。上房郡野山城領共伊達宮内少輔に被下、川上郡穴田城領共に

爰には隆式に
則に作る。備
中兵亂記には
隆徳に作る。

赤木丹後に被_レ下る。同國成羽城領共に三村孫兵衛に被_レ下、被_レ任_二越前守_一候。下原郷伊世部山城領共に明石與次郎に被_レ下、被_レ任_二兵部少輔_一。其外境目の城々へ御加勢被_二籠置_一。残る城々破却被_二仰付_一候。

備前兒島常山城沒落并上野隆式一類自害の事

同年七月四日に小早川隆景卿成羽を御發足、備前國兒島へ押渡り給ふ。浮田直家爲_二案内者_一。郡村八幡山城へ隆景入城、島尾城へ元清在陣、麒麟城に宍戸備前守在城、麥飯山へ藝州諸大將陣城を取り、常山城を遠卷仕給ふ。城主上野備前守隆式^{*}は、梅尾丸へ軍勢を呼集め申すは、年來對_二毛利家_一憤不_レ淺故、元親久式を某^勲進め候所に、三村石川無_レ事も可_二討果_一。事口惜き次第也。二百騎に不_レ足當城へ十萬餘の大軍を引請防戰可_レ叶とは不_レ思。牛臥丸を捨て此梅尾丸へ苔み、沼を前に構へ遂_レ合戰_一。其上にて切腹可_レ申と被_レ申時、敵身方共に諫けるは、阿波讃岐の御身方へ渡海あれかしと申す。阿波讃岐の身方無_レ頼ぞ。累年細川掃部頭眞之卿へ密通仕り、爲_二人質_一。嫡子源五郎を進置候へども、御加勢もなし。盡未來際於_二武道_一は無_レ頼ぞ。各は降參し給へ。某一類は敵免間敷ければ、藝州大將衆を引請け此丸にて切腹可_レ仕と申候へば、敵陣へ降參する者も有り、他島へ漕ぎ退く者も有り。七月六日に藝州軍勢牛臥丸迄押寄せ擧_二凱歌_一。隆式不_レ動、明日辰刻には切腹仕り、名を後代に留んと申し戰を止む。寄衆敵僞て他島へ渡海か、水練に入て退候はゞ攻口の油斷可_レ成。只攻崩せと逆木を引退亂入れば、隆則怒て二玉を込め無_レ隙放ちける。嫡子源五郎・二男高橋小七郎・鮑浦三郎城兵數十人働出る。梅尾丸と牛臥丸との間の池沼へ藝州勢被_二追込_一。數十人討れ、城兵取て返し敵近寄ば防矢射させ、暇乞の酒盛を始る。明る七日の朝諸陣へ觸るは、今日限りの一類只今切腹仕り名を後代に残す。檢使給はれと呼ばる。隆則繼母五十七歳、隆則藝州へ述懐を申儀氣毒成しに、今切腹の爲體を見れば目暮れ自害の事無_レ覺束、刀を縁の柱に卷付け行掛貫る。隆則走寄り五逆の罪恐れ多しと乍_レ言首を討落す。嫡子源五郎隆秀隆則に申すは、御介錯申度候へども、若輩の某自害の首尾無_レ覺束被_二思召_一候へば如何と、脇指を抜持てば隆則申すは、今度諸方の相圖調ひ、一方へ汝を差向け隆則掛る程ならば可_レ達_二本意_一の所、諸方の相圖相違して一家

滅亡無_レ是非_一と申せば、隆則を押退け腹十文字に切れれば、其弟八歳に成るをも膽の把_{タビネ}を差通す。十六歳になりける隆則の妹は、鼻高山へ退候へと進_勳むれども、老母と一所に果給ふ。隆則内室は三村家親の妹也。織田具足を肩に掛け上に經帷子を着け、二尺七寸國平の太刀を差し鉢巻任、隆則側に居るを、女性に不_レ似合_本太刀とつばやくを聞き、三村家に傳へたる重代也。家親に副申すと存_レ不_レ放_レ身候へども、死後に隆景卿へ言上仕り、爲_レ供佛施僧仕給へと敵勢へ切て掛り、木美十郎左衛門を切伏せ、本太五郎兵衛・三宅勘介に手を負せ、其後浦兵部宗勝が一備を追崩し立歸り、隆式と連座して、南無西方教主之如來、今日離_三途苦_者共、并元親・久式・元範・實親同蓮臺に安住し給へ、南無阿彌陀佛と高聲に念佛唱へ指違へ果けるを、舍弟高橋小七郎介錯仕り、其身も腹十文字に抓切、隆式死骸に寄掛り同枕に伏にける。見る人聞_レく人不_レ濡_レ袖と云ふことなし。

將軍家の武將毛利輝元・小早川左衛門佐、備前備中兩國御手に入れ、軍功の諸大將粉骨の軍勢へ有_三厚禮_一、何れも御暇被_レ下。隆景元清は備中國高松幸山城經山城猿掛山城へ御立寄、諸境目の御仕置、清水長左衛門尉・中島大炊助被_レ仰渡_一候所に、作州住草刈三郎左衛門景繼一類左馬助・黒岩土佐守企 逆心、信長御身方に成申由注進有_レ之に付、作州へ御出張也。

從義昭公戰功の將へ興猿樂能備中國境目御仕置の事

將軍源義昭公より浮田和泉守直家・同左京亮・嫡子與太郎・伊賀左衛門・清水長左衛門・中島大炊助・三村越前・笠岡掃部・村上彈正・同八郎左衛門頼津へ被_レ召、今度三村一類企_三逆心_一處に、各以_三粉骨_一令_三追罰_一御感悅不_レ淺と恫に宣る。爲_レ將者は治_三敵國_一則分_レ肉裂_一地賞功不_レ踰_一時、軍政を行ふと云ども、吾信長が爲_レに身を西海に蟄居す故、士卒の功を難_レ謝と宣へば、群下皆感應式代す。今日は辛白日晴天なれば、猿樂を興_{モヨブ}し戰勞を可_レ休と、北の丸へ御下り棧敷に御移り、功名の武士を被_レ召、左は毛利右馬頭輝元・吉川駿河守元春・河野兵部少輔通直・吉見大藏太夫廣頼・福原出羽守貞俊、右は小早川左衛門佐隆景・毛利治部大輔元清・穴戶安藝守隆家・浮田和泉守直家・同左京亮春

家・子與太郎・基家・伊賀左衛門・清水長左衛門尉宗治・中島大炊助元行・笠岡掃部・村上彈正・小田孫兵衛・禰屋七郎兵衛・三村越前、其外軍功の侍大將皆太刀佩て座に着く。式三番終つて食籠名酒佳肴種々の珍菓を賜り、見物の大小名金銀青銅木の枝に屬けて舞臺に積重ね。感能人の心を碎き耳目を清くす。能七番終て饗應色々被_レ仰付_二上にて、六戸備前守を被_レ召、今度於_二備前備中_一忠戰無比類_一候。鬼身に在城被_二仰付_一候間、國侍と遂_二相談_一敵方を相鎮め候へ_レと被_レ仰渡、鹿毛御馬致_二拜領_一候。清水長左衛門を被_レ召累年の忠節今度於_二南海_一信長細川眞之三好の軍勢を相押に付、兩國被_レ任_二存分_一候。高松城領石川跡式被_二仰付_一候。彌抽_二忠勤_一様にと被_二仰渡_一候。中島大炊助被_レ召、年來の被_レ揚_二軍忠_一侍大將十人餘一手に被_二仰付_一候。國中の諸仕置清水長左衛門同意に任_二心底_一、自分にて難_二計儀_一は元清・隆家へ遂_二相談_一候へ。刑部郷經山城には弟同名九右衛門を殘置き、不意の儀有_レ之は駈合候へ。幸山城代從_二藝州_一國司壹岐守被_二仰付_一候。中島大炊助加番相勤め境目の諸式公事等、任_二心底_一候様に被_二仰付_一候。禰屋七郎兵衛を被_レ召、數年の忠節不_レ淺由にて、服部郷六幡山城に嫡男與七郎に弟同名孫市郎を殘置き、不意の事有_レ之時は駈合相救候へ。自分_二冠山城領_一共に被_二仰付_一候間、宇喜多方上方境目を相守り候様に被_二仰渡_一、何れも御暇被_レ下令_二歸國_一、在城の普請等申付候。

中島元行戰死の者共爲供養千部を執行事

中島大炊助は賀陽郡刑部郷經山城領共に、幸山城加番を被_二仰付_一候に付、知行二千貫御加増、爲_二戰功賞_一庄兵部植木下總跡地拜領。外に一手の侍大將數輩與力數十人被_二仰付_一御懇意不_レ淺候。今度反逆の三村・石川・上野・上田殘黨を郷村に隠置く情を感悅す。諸城にて戰死の武士、於_二井山_一殺害侍大將可_二吊慰_一無_レ親類、元行は累代の恩を思ひ、於_二井山寶福寺_一雄西堂を爲_二導師_一一宗の僧侶を集め、天正四年七月十日より同十六日迄執行、法華千部の作善、自國は不_レ及_レ申近國の士農工商日々參詣。逆心の一族合戰の刃に亡びし所從へ思々に回向す。經王書寫供養の功德によつて、忽ち修羅の苦患を遁れ蓮臺に至らんと。難_レ有_レかりし事ども也。

難波船軍 附大阪城へ糧被籠事

天正九年征夷大將軍足利左馬頭源義昭公は、毛利輝元卿・小早川左衛門佐を御頼み、備後國鞆津に御在城中、天正二年七月に、攝津國大阪城主門跡顯如上人より以_レ使僧被_レ申越一は、織田上總介信長六萬餘騎を相隨へ當城を遠卷き仕り絶_レ兵糧通路一候。毛利輝元卿より兵糧御助成有らば、當城開運五畿内の軍將御身方に一心任、義昭公御歸洛之可_レ廻_レ計略と歎訴急也。輝元卿へ隆景有_レ御評定、御身方に隨身の侍大將を不_レ被_レ助置ば、重て隨_レ御身方一參者不_レ可_レ有とて、則海賊の大將能島・來島・因島へ有_レ御下知。討立つ海賊には、來島刑部・村上彈正・同八郎左衛門・笠岡掃部・浦兵部少輔・兒玉内藏允其外數輩、警固武士に粟屋右京亮・桂上野介・福岡彦右衛門・飯田讚岐守・虫上彌左衛門・井上又右衛門・中島大炊助、軍勢七千兵糧三萬俵船底に積み、七月十四日淡路岩屋着船。自是難波川口へ物見の船を遣し見れば、敵海賊の大將九鬼右馬允・間鍋主馬・沼野伊賀守・宮崎鎌太夫・寺田又左衛門・杉原兵部少輔・小島鹿目介・野口・尼崎・花熊五畿内の海賊、難波川口より住吉の岸迄船軍の備を決す。身方の軍船五百艘風上へ漕廻し、汐に隨ひ、敵船へ押寄す。大國・火矢・烙・鏃・飛鎗・火鞠・火桶・拋鏢・拋鏢手・武黎次第に備へたり。風上より敵船へ數多の炮礮を抛て相働、沼野伊賀守・同三五兵衛・小畑鹿目介・野口が船を燒崩す。此時中島大炊助・生石中務・賀屋東市助一手の船五十艘の警固を承、龍粧に進て火燒楯を積上げ、炮礮火矢を打掛け、敵具を調へ惣船の列を勝て急攻を争ひ、小畑鹿目介が船腹に自分の船を敷せれば、利を得たりと數多の炮礮抛て働け共、首冊の船なれば海中へ飛入己が船に取、零浪の煙と燒立る。中島大炊助は小畑鹿目介一手の海賊五十一人討捕る。歸陣の節從_レ義昭公_レ御劍被_レ下、早島三島を爲_レ軍功賞輝元卿より給る。五畿内の海賊沼野伊賀守・同三五兵衛・同傳内・野口を始め千二百人藝州方へ討捕る。笠岡六郎左衛門・中島大炊助若年にて船軍の始めなれば、皆々無覺束思ひしに、中國にて他船造能く下知して無類の功を立たり。藝州方の海賊船軍に得_レ勝利、難波川口へ中國船を漕入る時、佐久間右衛門尉備を出し、川の於_レ左右一遂、防戰節、鎧の上に篠掛仕たる武者真先に進み、是は根來大將岩室清祐

鐵炮千挺召連、將軍の御身方仕ると高聲に名乗り、三備に作り鞍具を立て佐久間が陣へ鐵炮打掛突掛る。佐久間が一手天王寺を指て逃退く。岩室清祐は得勝利相隨鐵炮を川岸に備並べ、兵糧船守護し城の東北に押着れば、及飢渴僧俗男女悦ぶ事限なし。清祐は可勝軍には身方仕ると申傳へ候へば、根來清祐の加勢は身方の吉祥也、と諸人大悅して中國へ歸陣す。攝州難波川口船軍無類の戰功と、舉後世也。

攝州伊丹城へ從毛利家加勢被籠事

攝州伊丹城主荒木攝津守村重は、織田信長卿に恨有て企謀叛候。將軍義昭公御上洛被遊候節は、可致先陣候間、毛利小早川より、當城へ加勢を被差越候様に御下知奉願由、中西新八郎を以て申上る。從義昭公輝元卿・小早川左衛門佐へ被仰聞るは、隆景・輝元卿へ申達は、當家へ隨幕下身方救不給は、重て頼を掛る不可有身方候間、御加勢を可被遣と決定す。則攝州伊丹荒木方へ從藝州・桂因幡守八百餘騎、雜賀三城入道三百餘騎にて楯籠り、同國花隈城主荒木志摩守へ從藝州・杉次郎左衛門千餘騎、鈴木孫市爲加勢楯籠、同國田中に將軍爲御上洛築一城、從藝州・粟屋內藏允二千餘騎にて被籠置門跡の加勢とす。淡路岩屋城も勢微成りとして從藝州・長屋左近大夫五百餘騎にて楯籠り、播州高砂別府へも加勢を被籠置。然る所に、播州別所小三郎長治は織田信長卿へ恨有て遂防戰由、自今隨御幕下將軍義昭公御上洛の節御先陣可仕候間、戰毛利家御不禮申上候段御赦免被下候様にと、淡河彈正を以て小早川隆景へ申達す。當家へ頼を掛る幕下救不給は、諸方の御幕下無覺束可有存間不可有疎意、向後御懇志可被成由にて、將軍義昭公より御劍を被下、輝元卿より鹿毛名馬金子三百兩、小早川隆景より白銀千枚、淡河彈正に被遣御暇被下、彈正歸國の節藝州の御懇意を承り、別所一族大悅不大方候。

別所長治毛利家へ降參の事

天正五年秋播磨國住人別所小三郎長治は、三好御追罰の節織田信長へ心を深く通じ、西國へ御働の時は可成龍

雲水魚思、領地は依レ功可レ任レ望と被レ語ければ、長治不レ及レ辭、隨レ仰同國城主人質を取堅め、播州國人無レ異義候間、御大將御一人長治居城へ被レ下候は、長治先鋒可レ仕由以レ使者ニ信長に達す。依レ之羽柴筑前守秀吉に西國退治の大將被レ命、天正六年三月軍勢七千五百餘騎を相隨へ、播州に來り糟谷が館を本陣に定む。翌日國中の諸士秀吉に謁し、門前に馬蹄を置くに無レ所、別所山城守賀相、三宅肥前守治定、爲ニ軍評定ニ秀吉の館にて有對面、長治連々懇意不レ淺、西國依レ爲ニ御導、乍ニ不祥^奇信長の爲ニ代官ニ某罷下候。武門の面目也。各の異見を承らんと語る。兩人申すは世間の小迫合と事變り、輝元も數十ヶ國を領仕る名將の有聞大家なれば、五度も十度も九死一生の可レ有ニ大合戰ニ軍談委細申しければ、秀吉被レ申は、各は先鋒なれば堅を破り強を摧くを專一と思はれよ、勝負の進退は大將に可レ被レ任とあれば、賀相治定聞レ之口を閉て退出す。別所一族老臣指集評議す。別所山城守申すは、秀吉今度當國に下つて當家杯を如ニ僕從ニ侮る。國中の諸士頭を擧げさせず候。信長の可レ成ニ智略。有ニ表裏ニ大將なれば、長治に爲レ致ニ先鋒ニ兩國靜謐の後秀吉に播州を給はり、當家滅亡させん事鏡に如レ移^映。信長兼て長治と兄弟の好を結び、西國退治の事を思と兼々の密通所存ならば、今度信忠か信雄か一人差下し給はらんと相待つ所に、秀吉を大將に被レ命諸將へ慮外の次第、向後は信長と絶ニ和親ニ秀吉と一合戰仕り、安否を爰に可レ極と諸人の異見を問へば、其時別所小八郎治定十七歳、席に進で貴殿の言葉一々可レ然覺候。兵法には無レ備を討つを善とす。長僉議して戰に非レ利。我に人數五百被レ付ば、一夜討して秀吉を國中より可ニ追拂^トと申す。別所甚太夫申すは、若年の御言葉には似合しく候へども乍レ恐愚意を述るに唯一偏の義と存候。國郡の主互に彼を討ち我に併せんとするに、彼我者を侵して深入をせば、身方の兵を數十ヶ國を切取て、今は天下^{本マ}の主たり。一旦の勝利を思ひ給はず後戰の利を御分別あれと申し、先祖赤松圓心自ニ苔繩城ニ起て達ニ本意、候元弘の吉例にまかせ、帝都に攻登り可レ建レ旗をと、賀相を始め末座の從類迄、一等して有ニ守拒之支度仕。偕信長へ使者を上せ申すは、秀吉を西國爲ニ成敗ニ被ニ下向^元候。最長治中國の爲ニ案内者ニ先陣を可レ仕候。毛利元就より輝元迄大國を數十ヶ國領し、兵多く將恩を荷ひ義を守る故、討平げん事、早速には難^レ叶。先士卒の後楯、人馬の休所、兵糧を蓄ふるの地、器械を見るの便に居城を修繕し、我根本を堅して後、敵を可ニ討

平一と云ひ遣しければ、信長被_レ任_ニ其意。於是長治一類志方城は櫛橋右京亮、神吉は神吉民部少輔、淡河は同彈正忠、高砂は梶原平三兵衛、野口は長井四郎左衛門、端谷は衣笠豐前守皆鳥銃の玉を鑄、箭の銚を磨て守備を計る。別所治定・同彦之進友之・同山城守賀目・三宅治忠、及、上月・中村・高橋・服部・後藤・長谷川・神澤・大村・光枝・上原・魚住・賀古・糟谷・來野・垂井・飯尾・藤田等は其城を引拂て總て七千五百餘騎、三木城道筋に落し穴を掘り柵を付、思々の智略を成して柵籠る。

別所重棟羽柴秀吉へ一身附長治へ異見の事

羽柴秀吉は、別所の一等逆心、何の宿意を挾んで如_レ此候哉、偏に若氣の所致也。無智無謀の賀相の所爲ならん、別所孫右衛門重棟を呼て、小寺・明石は元來志を我爲にす。長治雖_レ誘_レ之從はじ。賀相と爲_レ同胞定て可_レ爲_ニ一身と問ければ、重棟大に驚き、彼等逆意有りとは神明の有_ニ照覽_ニ努々不_レ存所也。上も告知せざる事はあらじと疑はれ奉らん事恐入て候。小寺・明石は無_ニ一の御身方御賢察に不_レ可_レ違と申ければ、然れば重棟に命じ以_レ書長治を諭さる。其意趣は今度西國發向の事は、長治同盟たるに由て也。且信長も於_ニ西國一軍旅の指揮長治に可_レ相議とこそ命ぜられ候へ、俄に何成怨言有て、半に變て異心を懷かれ候やと、秀吉同じければ、長治返答にも不及。使三度に至て多年輝元に恃まれし上は、又信長に可_レ從無_レ義。當城を葬地にて兄弟三人鬪死し、首、洛に入て信長に見參と思極むる所也。秀吉、我義既に盡せり。此上は長治を梟首せざらん限りは、再播州を不_レ可_レ出と自誓て、三木城を被_レ圍ける。抑、此三木城と申すは、前には巨川洋々とし、後には高山峨々たり。岩峙て道狹し。殊に累世の武將別所の一族は十三騎、雜兵八千餘騎心鐵石として要害を守る。然る所に、別所左近將監と光枝小太郎と先懸を論じて、既に鬪闘に及ばんとす。賀用中に隔りて、陣中に第一の憂は回祿と爭論との二也。若武者ども無_ニ思慮一爭論を起すとも、制止せらるべき人々に非ずや。一朝の怒りに大義を忘るゝは、不忠の至也。敵に逢て社捨るは可_レ捨命なれと、理を盡して諫めければ、其言に服して和解す。是ぞ別所滅亡の前兆可_レ成。秀吉小寺を召て、陣所何れの所が可ならんと問は

る。小寺申すは、書寫山は地形宜くして糧粟多し。諸方へ御手遣も可_レ宜と申す。依_レ之秀吉書寫山に營陣定め給ふ。

羽柴秀吉播州上月城攻給事

同年の秋、織田信長卿播州を爲_二討隨、羽柴筑前守播州へ差向給ひ、佐用郡上月城を取卷き攻給ふ。毛利家爲_二御下知_一備前國主浮田和泉守・備中國住人清水長左衛門尉・中島大炊助、爲_二加勢_一上月へ出張、城内に逆臣有て上月十郎を討て出す故、織田信長卿爲_二御下知、尼子孫四郎勝久・弟助四郎通久に、山中鹿之助・龜井新十郎・池田東市介・立原源太兵衛其外數輩の侍大將指添へ、七千餘騎にて上月に被_レ籠、中國より三木への絶_二通路_一押置き、秀吉は岐阜へ歸陣仕り給ふ。

毛利輝元播州へ發向附尼子勝久攻給ふ事

天正六年四月、毛利輝元卿爲_二御下知、吉川駿河守・小早川左衛門佐・毛利治部大輔爲_二大將、中國の軍勢率_二五萬餘騎_一播州へ出張、浮田和泉守・同與太郎は備前美作の勢を相隨へ、清水長左衛門・中島大炊助、備中勢八千召連れ致_二先陣_一候。藝州の軍勢播州佐用郡へ着城、城の近山に構_二陣城_一上月城の居體を見給へば、山高く雲を貫き、急攻の衛絶えければ、諸大將へ有_二軍談、勝負の損益を評し、銘々へ攻口を被_レ渡、鐵炮迫合有_レ之。清水宗治・中島元行持口は、南方の尾崎谷合城外第一の難所なれば、可_二働登_一事爲_二絶難地なれば、宗治・元行、降景へ陣訴仕は、備中勢番手の惣攻救免あらば、攻口より仕寄を付度申上候へば、可_二任_一其意_二由、長左衛門は、大炊助召連れ候金掘數十人に穴道を掘らせ、矢倉下迄掘寄る。宗治・元行は秀吉後詰の働を氣遣ひ、高倉山へ差向ひ備を立待居る、籠城の諸侍心苦に見えける。大炊助兩將へ申上るは、上方勢後詰働不成様に堅固に御押被_二仰付_一は、落城日數有間敷由申上ければ、譽感不_レ淺候。羽柴秀吉・同小一郎秀長城内の急難を爲_レ救、淺野彌兵衛・蜂須賀彦右衛門・山内猪右衛門・小寺官兵衛一萬餘隨身、高倉山に差向ひ軍の用意急也。宍戸安藝守・同善左衛門谷合より尾崎へ石劔の仕寄を付け陣屋を並べ居

たり。雀部美作・河内左衛門に、七千餘騎を付て城中を押へ、自身は一萬餘騎を隨へ高倉山に打て登れば、上方の大將本陣へ引退く。若者共追懸退後れたる敵二百餘討捕り、中島元行の拵へ置きし掘切落穴へ數輩落入り討捕る。宍戸安藝守勝閑を作り惣掛りを用ひ、弓鐵炮百々放に仕ければ、織田信忠卿・佐久間右衛門尉・瀧山左近書寫山迄逃退き給ふ。此時宍戸安藝守・中島大炊助は、神吉城を爲し介し備を寄す上方の軍勢へ矢を射掛け、鐵炮打懸くる間に、神吉城へ兵糧を取納め、宍戸善左衛門に三百騎差添へ爲し加勢を被し籠置、上月の持口へ引入れる。

清水宗治へ禰屋一手鈴木・秋山逆心並尼子勝久切腹附山

中鹿之助僞て毛利家へ降參の事

備中國高松城主清水長左衛門宗治は、播州へ出陣の留守を勤むる清水月清入道・中島九右衛門・林三郎左衛門より上月へ注進するは、禰屋七郎兵衛一手の鈴木孫右衛門、禰屋が郎等秋月運右衛門、信長卿身方に成り、清水才太郎を人質に取り外の番侍に申は、信長卿御身方に被し頼候。同意の方は人質を出し候へと申間、御歸陣御延引候はゞ、大事可し出来と告來る。是は長左衛門・大炊助上月城へ仕寄を付け、水道を掘切り城中及し難儀、上月城へ秀吉色々手遣あれ共、宗治・元行兼て得徳の事なれば、秀吉ノ計略に不落入候。小寺官兵衛は禰屋七郎兵衛と縁者にて、鈴木・秋山兼々通路仕りけり。秀吉の計略に、官兵衛を以て、禰屋が一手の家來身方に仕り給はゞ、清水男子を奪取り播州へ來れば、清水・中島も信長卿御方に可し參、無し左共上月城攻口を引去らば、落城有間敷候。清水・中島信長卿於し御方參は、鈴木・秋山へ兩郡可し被し下と秀吉誓紙被し遣れば、兩人大きに悦び、才太郎を懷け取り船にて播州へ連れ可し登支度也。中島九右衛門・清水右衛門申すは、才太郎懷け取候共、城外へ出るならば兩人才太郎共に可し討果と申し、高武本城へ押込め、番侍を付置く由上月へ注進仕る。宗治・元行承り不し驚、我等大事の攻口を承り、妻子の難儀を非し可し存。弓取の習に、軍に出る日切に忘し其妻子、境を越ては離し其親し武士の道、才太郎共に鈴木・秋山の急ぎ討果せよと申付け、郎等林三郎左衛門を戻し、上月城中へ晝夜仕寄を掘寄せければ、水の手の矢倉を掘崩しけ

り。上月籠城の諸大將苦心仕り難_レ抱叶_レ由織田信長へ從_レ羽柴秀吉ニ陣訴有ける由。信長卿驚き給ひ、城之介信忠卿に瀧川左近將監・佐久間右衛門尉・池田紀伊守、其外三萬餘騎を被_レ指添ニ發向仕り給ふ。高倉山の峰々野原に陣取り馬蹄を休め給ふ。隆景・元清五畿内の大勢隨身、上月へ發向の由義昭公へ有_レ陣訴ニば、輝元卿爲_レ先陣・吉川駿河守二萬餘騎にて上月へ着陣、數日對陣白眼合ひ給ふ。輝元卿、清水長左衛門・中島大炊助を被_レ召、今度於_レ高松ニ禰屋が與力家臣、不思議の企ニ反逆ニ由無_レ覺束候。當所攻口に中島大炊助殘置き急ぎ、高松城へ歸り、嫡子才太郎を取返し、境目の城々仕置申付候様に御内意の趣、中島大炊助へ遂_レ相談ニ難_レ辭、大炊助へ備中勢攻口を相渡し、宗治は成羽越前を召連れ高松へ歸城。鈴木・秋山へ申達するは、才太郎を可_レ返、自今前世の通りに忠節あらば本知相違有間敷候。及_レ異議_レば乍_レ不便ニ才太郎共に鈴木・秋山を可_レ討果_レとあれば、林三郎左衛門は秋山と親類故、種々に取扱ひ才太郎を返し、鈴木・秋山より人質を取り備中無事に仕り、宗治又上月へ參陣、攻口を相守り候處に、織田信忠卿・羽柴筑前守・同小一郎は、五月二十一日未横雲の不引に、瀧川左近將監・佐久間右衛門尉・小寺官兵衛・淺野彌兵衛・蜂須賀彦右衛門・山内猪右衛門、魚鱗形に備三軍鼓を調へ押し來る。吉川元長・吉見大藏大輔・福原出羽守は、織田信忠卿の先陣へ切掛る。宍戸安藝守・上原右衛門大夫・中島大炊助先手にて、狼が谷岨より城之介信忠卿の旗本へ突掛る。小早川藤四郎・立花左近・來島判部は、高倉山の尾崎より信忠卿の跡備へ弓を射掛け、鐵砲を打掛け攻上る。信忠卿の先備數百宍戸守藝守へ討捕り、中島大炊助掘切置候落し穴へ落入り、信忠卿の御旗本四度路に成り浮立候節、吉川元長山陽道の勢二萬餘騎高倉山へ上り、鐵砲打掛け擧_レ凱歌ニ入亂れ相戰ふ。織田信忠卿・羽柴筑前守・同小一郎旗本より、諸手へ以_レ軍使ニ引退候様に相觸る。藝州家の諸勢追慕ふ。上方勢は書寫山へ引退き給ふ。後陣の者共二千餘吉川元長の手へ討捕り擧_レ勝閑。上月籠城の軍勢後詰の身方敗軍を見及び、城卒力を落し大半落失せければ、尼子孫四郎勝久弟助四郎通久、防戰の軍慮盡き果て、天正六年五月二十九日自害し、名を滅亡の跡に残しける。山中鹿之助は城外林間に備人を立並べ防戰の用意を備へ、其後天野五郎右衛門攻口へ、芝橋大力之助爲_レ使者申越は、尼子兄弟弓折れ矢種盡き自害を仕候。鹿之助儀一命を御助候は、藝州家先陣に加り忠節可_レ仕候。一命安堵仕様の御取持奉_レ

願候。若於不_二相叶_一は一族百餘人元明の御陣へ駈込討死可_レ仕と申越候。隆景へ申上れば三將御評議の上にて、鹿之助事主君を再_三取立發_二天下_一名譽の勇士也。一命無_二相違_一候間、向後對_三當家_二可_レ被_レ抽_二忠節_一の由、先知なれば周防徳地の庄にて五千貫可_レ被_二宛行_一の間、急ぎ可_レ致_二下城_一の旨御下知也。鹿之助申すは、難有仕合其上過分の領地を被_二仰付_一事、恭と御禮を申上候へども、心掛りに相見候。従類を扶持仕り置き、向後は忠節を可_レ存由、天野五郎右衛門へ懇に申上げ、親和の體に成候。武者振り器量無類の勇士也。

中國兵亂記三終

